視角

「自分から」することの意味

西原彰宏

子どもにとって、「自分から」することにはどういう意味があるのだろうか。ある日の三歳の子どもとの遊びをもとに考えてみたい。

私が昔勤めていた、幼稚部・小学部からなる小さな学校では、土曜日の午後に卒業生の活動がある。その活動に子連れで参加しているスタッフの、三歳の子どもと遊んだ時のことである。その男の子は四月から幼稚園に行くことになっている。また、近いうちに弟か妹が生まれる予定である。

ある日の夕方、私はその子に誘われ、人気のない広い遊戯室でクマのぬいぐるみを使って病院ごっこを始めた。けがをした大きなクマと小さなクマを手当てする医者の役を私にやらせる。この遊びは今までも何度かその子としたことがある。次にその子は、そばに置いてあった小さなボールがいっぱい入った大きな二つのかごを両方ともひっくり返した。「どうしたいの?」と聞いても返事がない。私は、常識的に「自分で片づけて帰るんだよ」と小言を言った。

しばらくすると「お父さんのクマがいない」と、探しに出掛けた。その間に私は、この子どもがばらまいた大量のボールを、いくらかでも片付けておこうとかごの中に入れ始めた。父親のクマだという白い大きなクマを見つけてきて、「お父さんもいるんだ。赤ちゃんもいるんだよ」と言う。子グマと母グマの横に父親のクマを並べたかと思うと「なだれだぁ」と叫びながら、集めたボールを三体のぬいぐるみの上にぶちまけたのである。ここから私は、本気でこの遊びに加わった。子どもが何かを考えていると感じたからである。同じようなことを長い間何度も繰り返し遊んだ後、その子は母グマを持って、病院である場所を出ていき、数メートル離れた所に立ち、向こうを向いたまま動かなくなった。私が子グマの

声で「お母さん、どこー。帰ってきてー」と言うと、少し間をおいてから帰ってきた。子グマを持った私が、「お母さん。どこに行っていたの。寂しかったよー」と母グマの胸にむしゃぶりつこうとした時である。「だめでしょ。そんなことをするとお腹の赤ちゃんが苦しいって言うでしょう」と、子グマを諭した。

そのうち、この子は母グマを操って、少し離れた所にあるタオルの棚の前に行き、棚の方を向いたまま、動かなくなった。何をしているのか。理解できない私は、子グマを操って「お母さんどこにいるの。何してるの」と母グマの所に行き、「お母さん。抱っこして」と、子グマを母グマの腰の当たりに抱きつかせようとした。その瞬間母グマは子グマの方を振り向き、きっぱりと「お母さんは今選んでるの。赤ちゃんの物を買い物しなくっちゃ。待っていられるでしょ」と、たしなめた。子グマである私は小さな声で「お母さん、お母さん」と半べそをかく。母グマを操るその子は、しばらくしてから振り返り、先程とはうって変わった穏やかな顔で「もういいわよ。さあおいで」と母グマの両手を広げたのである。

この子の話しぶりや顔つきが大人のようであったこと、また、この遊びに出てくる人形の家族構成が、祖母が登場しない点を除いては、彼の家庭の家族構成とそっくりであることを考えると、今行われていることはこの子の実体験に基づくフィクションと考えてよいと思う。後でこの子の母親に聞いたところ、この子が最近夢中で読み聞かせてもらっている絵本の中になだれでみんなが埋まってしまうシーンがあるという。彼が黙ってボールが入ったかごをひっくり返した時、私は一瞬気まぐれではないかと考えたのだが、彼の中ではこの時すでに、はっきりとしていないにせよ、いつも読んでもらっている絵本のある場面の記憶と結び付いた何かのイメージが、生まれかけていたと考えていいだろう。

また、この母親自身が、赤ちゃんを理由に、抱きついてくるこの子を拒否することはないが、父親や祖母はこのセリフをよく口にするし、母親が料理をしたり洗濯物を干す時、この子に背中を向けたまま

「待ってなさい」と言うことはよくあるという。

葛藤を形にし、答えを探求する

この子には間もなく弟か妹が生まれる。また、四月からは幼稚園に行く。この子どもと母親は、それぞれが成長の節目にさしかかっている。その節目で起きている心の中の葛藤と希望を、この子は遊びの中で表したのだろう。しかもただ表すのではなく、自分の葛藤に対して自分なりの答えを出そうとしている。母親が今は自分の方に振り向いてくれず、背を向けたままであっても、必ず自分の要望を心に留めておいてくれて、少し待ったら応えてくれるのだと、彼は考えているのではないか。

遊び始めには、どう遊ぶか決まっていなかったこの子どもの心は、「なだれ」を長い時間をかけて幾度となく繰り返すうちに、突然心の葛藤を表す場面をつくり出した。子どもの遊びの中にも浅い深いがあり、子どもが心の底の方にある思いを遊びの中に表すためには時間がかかることがわかる。また、浅い状態から深い状態への移行は一瞬のうちに行なわれるから、それがいつ起こるかは、付き合っていても予想がつかない。そばにいる大人の責任は大きい。この日私が、腰を落ち着けてかかわることができず、大人の小言を言うだけで終わっていたら、こういう展開にはならなかったかもしれない。

自分からすることで自分の頭で考える

赤ちゃんが生まれてくることも幼稚園に行くことも彼が選んだ状況ではない。子どもはいつも、状況に受け身で投げ込まれるが、その状況を、自分なりに意味付け、自分で引き受けられるものにしようと努力する。「自分から」何かすることがもつ意味の一つは、それが、今までの自分の見方や記憶との対話をもたらし、自分の新しい見方や判断をつくることにあるだろう。大人の目を気にせず、心躍らせ自分から事を起こせる空間と仲間をもつことは、子どもが主体として育つ上に不可欠の権利である。

（国立音楽大学）